



連載第 196 回

中標津発・三友盛行さんに訊く
「酪農危機」への処方箋(後編)

飼料代の高騰や個体販売価格の低下、牛乳・乳製品の需要低迷という「三重苦」の中で、持続可能な酪農に転換していくには、どう考え行動していけばいいのか――。「マイペース酪農」を提唱してきた三友盛行さんは、「土・草・牛の好循環が実現できる。適正規模の酪農の基本に立ち返る道」を説き、牛の頭数も機械類も負担にならない規模で暮らすシステムや、「家畜とともに耐えて待つ精神」の大切さを強調する。後編では、先人の教えに学びつつ、農村志向の人たちと創る明日への希望について、じっくり話を聞いた。

適正規模の深い意味を見つめ 「土・草・牛の好循環酪農」へ

「1haに親牛1頭」を基本に
「適地適産」と「適量」が大事

――「適正規模の酪農」の基本について、ご説明ください。

三友 人の食べられない草を、乳牛を介して牛乳や乳製品、肉などに変えることが酪農の基本です。しっかり草を食べてもらうと、「1ヘクタールの草地に親牛1頭」という適

正規模の目安が出てくる。だから、(草が育つ)土が基本ということだね。さらに、ミルクと同時に糞尿が出て、それを草地に戻すと土は良くなる。つまり、好循環を創り上げて持続させるのが酪農の役割です。

どこかが突出すると好循環の円が崩れてしまう。そこで、生産量を抑制しながら「土・草・牛」が循環していくためには、人間の自制や節度が

あつて初めて可能になる。好循環によって、無理と無駄のない牛乳・乳製品が造られ、栄養のある安全・安心心食品が家計を賄うコストで実現できる、と考えています。

――「好循環」が基本になる。
三友 適正規模には「適地適産」と「適量」が大事です。寒冷地の北海道とりわけ根釧地方は、草以外は作りにくいから、草地を造って牛を飼う

人が「穀物はできないけれど草はある。適地適産は酪農だよ」と言いました。僕は、(収穫できる)草の量で生きているが、ここで暮らすことの意味だと思っている。でも、世の中は不思議なもので、たくさん乳を搾っている人は、(濃厚飼料の高騰・個体販売価格の低迷・生産調整による)「三重苦」で暮らせなくなってきたという現実が起きています。

このことから、生産者・消費者・行政は何を学ぶかが大事です。今までは、「三友さんは特別だ」と片付けられたけれど、昔なら当たり前の酪農が特別になった時代の不幸がある。現在は北海道開拓の4代目の時代です。「自立農家になるために生産性を高める」という伝統には罪がない、と僕は思っています。ただ「もういいんじゃないか」とは誰も言わなかった。

「土・草・牛」の好循環を創り
風土に生かされた酪農を持続

――持続可能な酪農への転換には。
三友 酪農の歴史を振り返る本を読むと、根室原野には草があり、牛を2〜3頭入れて乳を搾りながら(経営規模が)大きくなってきた、と

ことは適地適産といえる。

ただ、「適量」は誰も言わず、「量を増やせば幸せになる」とされてしまった。「経営も安定し、収入も増えるから」と。ところが、これでは食べる人を増やすけれど、作る人は貧弱になる。今までは外国の力を借りて何とかやってきましたが、これからは(輸入飼料が)頼りにならないので自立しましょう――という分かりやすい話です。

――乾草づくりと「風土に生かされた酪農」の話をよくされますね。

三友 太陽エネルギーを効率よく使って乾草にすると、冬の飼料の貯蔵性も牛の健康にもいい。ところが、乾草を作るには3〜4日間、好天が続かなければいけない。昔の根釧はお盆の頃の天候が安定していたけれど、今は早刈りになっています。ガス(濃霧)が発生して乾草が作りにくから、機械化によって(牧草を)ラッピングして生産量を増やそうとする欲が出るわけです。

――加えて外国産の穀物を多給し、年間乳量1万キロを実現させている。

三友 自分の生きる場所を肯定できず、「条件が悪い」と常に否定している。昭和初期の大冷害の時に、先

書いてある。「牛乳の処理をどうするか?」という話から、バターや練乳などに加工して売っていく、と少しずつ大きくなり、工場ができて：までは良かった。でも、戦後の高度成長経済の下、誰かが「もつと搾れ」と言い出したわけです。

――右肩上がりで人口が伸び、それに応じて所得も増えていく時代じゃないのに、酪農業界はつい最近まで生産拡大を続けてきました。農業分野の中でも特殊ではないか。

三友 外国から穀物を持ってきて乳を搾るから、「施設を建てる面積があればいい」となった。生産者に求められるものは、草を牛乳に変えた量に見合った社会です。生産者は「平均2百トンしか搾りません」、乳業会社は「これを処理します」でいい。それに相応しい規模の農協で構わない。好循環を起こせる草の量で社会が成り立つようにして、1頭あたり年間乳量が4千〜5千キロくらいだと牛も健康になります。

夏は放牧できるけれど、冬場は越冬飼料が必要になる。昔は天日干しで乾草を作った。ところが、もつと乳量が増えなくなり、牛を増やす↓栄養のある草を与えるために早刈りす

(みとも・もりゆき)1945年、東京都生まれ。都立高校を卒業後、酪農実習などをへて、68年に根室管内中標津町俵橋へ開拓入植。「1haに親牛1頭」を基本にした循環型酪農を営み、2017年に新規就農の夫婦に経営を移譲。10年、蘭学者の緒方洪庵が開設した「適塾」と適正規模の酪農にちなんで私塾「酪農適塾」を設立。現在は毎月1回、「土・草・牛」の観察や座学を中心にした学びの場などを主宰する。93年から6年間、中標津町農協組長。著書『マイペース酪農』(2000年、農文協)ほか



酪農適塾



見学者に完熟堆肥の作り方を説明する三友さん(2016年秋)

**成り立たなくなる大型化を脱し
若者が参入可能な環境づくりを**

——22年11月発行の『マイペース酪農通信』に「酪農再建のための適塾提案」が載っていました(別表)。北海道酪農の平均値の1戸あたり経産牛が82頭、年間生産乳量が約8百トン(20年実績)に比べ軽装備型ですが、20〜30%の利益率を確保している。牛にも人にも負担が少なく、持続可能な酪農を志向しています。

三友 今の酪農情勢で考えると、大型酪農は成り立たなくなる。こうしたら根室の酪農が残っていけると

僕が逆がいいと思った。そんなに草刈りが大変だったら、良い天候になるまで待つて収穫する。搾乳は、収穫作業の負担にならない頭数ならば、人間が3食摂るのと同じように対応できるんじゃないかと。20頭搾乳なら朝晩1時間ずつで済む。頭数も機械も、負担にならない規模で暮らせるシステムこそ大事であって、ロボット化することではないのです。地域振興を考えるならば、できるだけ多くの農家が地域に住むことが大元だと思います。開拓初代のじつちゃん、ばつちゃんが苦勞して、3代目によくやくこまできたのだから、現状維持で循環型の酪農で行こう、と。(64年の)東京オリンピックを境に社会が落ち着いてきた時、「もっと人間的な社会を創ろう」と考えれば良かった。今は豊かさの転換期だと思えば、その成果をどこに戻そうかという話なんです。

一代ですべて経験した僕は、40頭搾乳になった時に30頭に戻して人間らしく生きていこうとした。だから生産者や業界は無理のない日常を送れる酪農形態を創ることで。

政策的には、「それが社会の進歩だ」という視点を持って税金を効率

いう話を、マイペース酪農「註3参照」の事例を基にまとめたものです。例えば、Cの酪農適塾牧場(吉塚牧場)は、50ヘクタールの草地に経産牛36頭×5キロ/頭×年間180トンの生乳を生産します。草地更新はせず、穀物は与えません。このやり方だと今後も残っていけます。

——放牧酪農をやりたい若い人は結構いますね。

三友 かなりの希望者はいるけれど、「酪農をやってみたい」「動物とともに暮らしたい」と思って問いかけると、「一定の規模でないと、うちの農協は入れません」と門前払いされ

よく使う。そして、税金の使い方が消費者に反映するようにしてほしい。酪農業界には「不足払い制度」(註②参照)がありました。畜産クラスター事業で1戸に何億円の公費を使っているのだから、消費者も納税者の視点を持ち、「牛乳・乳製品を」買う以前にしっかりと発言すべきです。

——その消費者は勉強不足の人が多い(嘆息)。酪農は流通構造が複雑で、食卓に上るまでに多くの過程がある。米や野菜ならば大体のイメージが湧くけれど、理解が難しい。

三友 消費者も、今は安い物しか選べない時代です。「体に良くない」なんて、あまり考えないでしょ。

**地域分散型で自給的な暮らしへ
農村志向の人を受容する社会を**

——ヨーロッパでも、やはり畜産は大型化して、搾乳ロボットはかなり普及していると聞きます。そうならざるを得ないのですか？

三友 環境問題も含め、ブレーキは掛かり出した。それと、欧州は二重構造です。フランスは食料自給率の高い農業大国ですが、条件のいい地域は生産コストの問題として捉え、アルプス方面に向かうと条件不利地

域だから農業を残そうとしてきたもつとと言うと、「条件不利地域があつてのフランス」が前提条件です。彼らの精神的な余暇や食文化は、昔のまま条件不利地域を残しておこうというのが基本になっています。

——しかし日本は今後、富めるどころか貧しい国になっていく。

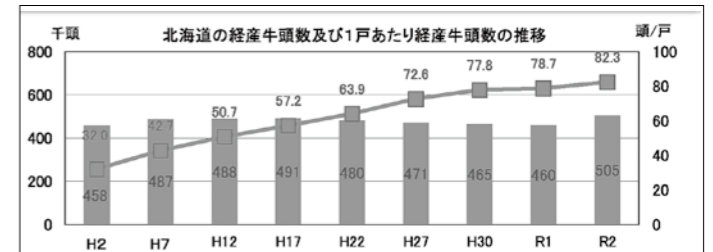
三友 そうならば、地方に拡散して、自給的な暮らしをする社会を創るのもひとつの方法です。地政学的にいえば、日本ほど世界で自然に恵まれたところはありませぬ。「資源がない国だ」と言うけれど、水資源は世界最大だから、お米や野菜を作ったり、森林もOKだよ。それらを活かしていったほうがいい。

歴史的にみると特に明治以降、村を出て町で暮らし、故郷の村は錦を飾るところにしてしまった。欧州の歴史は、どんなに大貴族や大富豪になろうが、皆自分が牧場主なんです。都会生活を志向しながら、農家を常に意識している。特にフランスやイギリスはそれが強い。日本は農家そのものを捨ててしまひ、農業を軽視してしまひ。だから今後は、農家を志向する人を受け入れる社会を創っていけばいいのです。

※註② 不足払い制度=保証価格とメーカー支払い可能価格との差額を交付金として支払い、生産者の手取り価格を保証する制度。加工原料乳などに対する価格政策として実施されたが、1999年制定の「食料・農業・農村基本法」の趣旨を踏まえ廃止された

※註③ マイペース酪農=「草・牛・人間の循環」を重視する酪農のあり方。草地面積に応じた適正規模の経営を基本に、牛に無理をかけないために濃厚飼料の多給による高泌乳を避け、放牧を採用する。糞尿は完熟堆肥にして草地に還元し、環境や牛、人間に負荷の少ない酪農を追求。推進主体は「マイペース酪農交流会」で、月例の交流会と年1回の学習会などを続ける

※註① 搾乳方法=手搾りからバケツミルカー、送乳管を通してバルククーラーに導くパイプライン方式へ変遷。近年、主にフリーストール牛舎で10頭前後を一度に搾乳できる「ミルキング・パーラー」と呼ばれる専用施設(道内では1,590戸が導入=2020年現在)や、ロボット搾乳(430戸=21年同)が増えている



出典：北海道農政部「北海道の酪農・畜産をめぐる情勢」(2022年7月)

世情に惑わされず自足の道へ
地方に人が根づくことが必要だ

三友 酪農経済学者の天間征さん

「牛と私たちは共同体の一員」と話していただきました。牧場という共同体を成り立たせるために、「人間も牛もともに働く」という発想ならば変な問題は起きないんじゃないか。多くの酪農関係者がそうした考え方を持つと、適正規模になっていく。

—— 標茶町のある牧場の奥さんが「牛と私たちは共同体の一員」と話していただきました。牧場という共同体を成り立たせるために、「人間も牛もともに働く」という発想ならば変な問題は起きないんじゃないか。多くの酪農関係者がそうした考え方を持つと、適正規模になっていく。

—— 畜産クラスターで借金して二進も三進もいなくなったら、同じような人が出てくるかもしれない。しかし、納税者に対する責任と、飼っていた牛を虐待した責任はある。

三友 「牛を家族だと思え」と言う人がいます。家族として扱える範疇と捉えると、無制限に増やすことはないよね。動物を動物らしく飼うのは家族として扱うことであり、頭数に制限があるはず。おのずと適正規模に限定され、自分の目の届く範囲の牛という話になります。

—— ロットファームなんて、「俺は国家公務員なんだ。借金は国が持てばいいんだ」と言っていた。「生命まで取らんべ」という話でした(笑)。

三友 宇都宮仙太郎(註4参照)がおもしろいのは、彼は縁があつてウイスコンシン大学で勉強して帰国し、アメリカ型の酪農をやるつもりでした。そしてもう一度、同大学に赴き、学長のデンマーク農業の講話を聴いた。そうした中で、宇都宮も

先人たちの言葉に学びながら
家畜とともに耐えて待つこと

※註④ 宇都宮仙太郎(1866～1940年)＝1891年に札幌で牧場を開設し、のちに牛乳販売とバターの製造を開始。現在の雪印メグミルクの土台を築くなど、「北海道酪農の父」と称される。酪農には「役人に頭を下げないでよい」「嘘をつかないでよい」「牛乳は人々を健康にする」という「牛飼い三徳」を唱えた

	A	B	C	D	E	F	G	H
草地面積(ha)	30	50	50	55	50	60	60	20
経産牛頭数	20	30	36	35	25	40	45	15
1頭当たり乳量	5000	6500	5000	5500	5500	6300	7000	4500
出荷乳量(t)	100	200	180	190	140	250	320	70
放牧の実施	○	○	○	○	○	○	○	○
乾草/ラップ	有/無	有/有	有/無	有/無	無/有	有/有	有/有	有/無
配合飼料(kg/頭)	0	5	2	0	3	2	2	0
乳価(kg/円)	100							
個体価格	期待値	初任35万円	ホル雄・雌	平均5万円	F1雄・雌平均	8～10万円		
利益率(%)	20～30%							

マイペース酪農家の経営状況を基に作った「酪農適塾」の提案

黒澤西蔵(酪農学園の創設者)もデンマーク農業派になっていった。2人とも、「気候風土が似ている北方農業を確立したい」と明快に言っています。適したのが酪農だ」という話になり、町村敬貴さん(町村牧場の創設者)らが土壌改良をやつてきた。

—— 僕らは農業高校時代、「1ヘクタールに1頭」と教わつた。70年前後は普通に語られてました。

三友 「土と草を良くしよう」はあつても、ゴールを語る人がいなかった。例えば、「スマート農業が必要か?」という点、農業をやる人が少ないからです。農業をやる人が増える中で、「スマート農業が必要」はあつてもいい。「就業人口が少ないからスマート農業で解決する。それが時代の寵児だ」では逆で、短期的すぎる。農業の技術は、人間の手足になる農民の道具程度でいい。

三友 僕はパソコンを使わないか

(故人)は、帯広畜大に在職中の1980年に『離農』(日本放送出版会)という本を出した。彼が離農した人にインタビューすると、「離農して初めて自給自足が分かった」と言つたそうです。「農家は収入以上の暮らしをしているから自給自足じゃない。サラリーマンはもらった収入で暮らすから自給自足だ」と。

酪農家も自分の中でやり繰りしなさい、と言うしかない。「レクサスじゃなくて軽トラもありますよ」とかコメントを添えてね(笑)。まず、自分の頭で考えることが大事なかな。

—— そうですね。

三友 先日、古い本を読んでいたら、「世情に惑わされる必要はない」と内地の米農家が書いていた。自分の田畑に対して精一杯やっつけていけばいい、と。人生を終わるころになつて、「もう一回生まれたら何にならるか」と思うと、自分は学校の先生や公務員は無理だよな、って。結局は農家しかない。経済は揺れ動くかもしれないけれど、農家は安心して暮らせる、と書かれていました。

宇都宮仙太郎は「酪農の三徳」の中

ら、毎月開催する「酪農適塾」のレジュメ作りに1カ月かかります。今の人も昔の人も、言うことは一緒です。「農業は待つことだ」と内地の古老が言っている。耐えて待つのが大事で、それはお米や草が生長することへの望みだといいます。「待つこと」によって成就する」と。でも、今は違う。ある物同士を混ぜて機械を回すと工業製品ができるけれど、農業の場合は生産するのはお米や草自身なんです。ただ畑をひっくり返しても物はできません。

酪農の場合、農民が生乳を作ることはできないので、牛に生産してもらおう。草があつて土があるのだから、最善を尽くして見守るだけだよ。家畜とともに「耐えて待つ」ことであつて、動揺しない豊かな心が大事。個体販売価格が下がった「草がうまく採れなかった」といっても、牛がいて暮らしていける安心の保証が血肉になつていけば動揺しない。大変だつたら、「フキとワラビを食えばいいんだ」という気持ちがあれば大丈夫。宮沢賢治じゃないけれど、オロオロすればいいと僕は思う。今の人はオタオタしすぎる。オロオロするうちに解決の道が見えてくるか



「酪農適塾」では草地や牛の観察のほか、削蹄などの技術も継承してきた(2012年春)

で、「役人に頭を下げなくともよい」と言っている。これは大事なことで、「世情に惑わされない」という話ですよ。良い職業なんだから、それをしっかり受け止め、細かいことに惑わされずに生きるというのが僕の考え方です。これだけ心が自由なんだから、その分だけ物が不自由なのは仕方がない、と。

—— 地域差はあるけれど、自給を基本に考えると酪農だけが生きる道ではありません。

三友 日本はお米の国だから、「米



旧三友牧場(現・吉塚牧場)の牛たちは穏やかに人懐っこい(2016年秋)

ら、待てばいいのです。規模の大小に係わらず、僕は農家の気持ちの方が分かります。「大きいのは悪いことだ」と批判する気はないし、みんな心は「酪農家として平穏に暮らしたい。そのために精一杯やっていると。だけど、大きくなったことの責任にきちんと対応し、お互いが助け合うことです。そこを一度どこかで整理しないといけない。」

三友 僕が実習した50年前のバイ

を主食にしてはどうか」という話があつてもいい。北海道はお米と小麦、本州は米を中心として裏作で小麦、という選択肢もある。

「食料自給率が38%ある」と言つても、外国のエネルギーを使つての話です。国外産の部分で最小限にすると、減反はせず、できるだけ低投入でやる面積で、お米や生乳の生産を維持する形がいい。地産地消的な農業をやりたい人が全国に広がり、全体を考えていく必要があります。

—— その通りだと思えます。

三友 もっと言うと、人類の歴史は作る人から食べる人へ変わつていく。大多数は後者であり、これからは「作る人をどうやって増やしていくか」が大切です。そのために行政的な支援も必要で、国の構成や過疎・過密の問題を考えると、都市ばかりに集中せず、地方に人が根づいていくことが求められる。現在の農業人口は60代以上が大方で、あと10年もすると皆リタイアです。その時、「日本では、お米を作れないから輸出してくれ」と外国に頼らなくてはなりません。自明の理ですよ。

—— 本日は長時間ありがとうございました。(22年11月18日収録)

※筆者のHP「滝川康治の見聞録」<https://takikawa-essay.com/> に本シリーズの過去記事を収録しています。ご参照ください。